

# 日本とつながる イスラエル



毎年、テルアビブで開催される国際観光展の日本ブースにて、ANAイスラエルのマネージャーと（筆者は左）

## 丸山 修 (まるやま おさむ)

前・在イスラエル日本国大使館二等書記官  
国土交通省北海道局総務課付

1971年神奈川県鎌倉市生まれ。99年北海道開発局入局。北海道庁、会計検査院への出向を経て、2014年4月から17年6月まで在イスラエル日本国大使館経済班に勤務。主にインフラ、観光、直行便を担当。現在は国土交通省北海道局総務課勤務。

\*1 イスラエル国政府はエルサレムが「首都」であると宣言しているが、日本を含め国際的には（一部の国を除き）認められておらず、2017年12月現在、エルサレムに大使館を置いている国はない。

\*2 数値はイスラエルが併合した東エルサレム及びゴラン高原を含むが、国際的には承認されていない。

## はじめに

シャローム!! (ヘブライ語で“こんにちは”の意)。筆者は、2017年夏までイスラエルの事実上の首都、テルアビブ\*1にある在イスラエル日本国大使館に勤務しておりました。さて、皆さんは“イスラエル”というキーワードから、何を想像されるでしょうか。イスラエルは日本の西方約9,000kmと距離があることや、2017年12月のトランプ大統領のエルサレム首都宣言を発端としたイスラエルの情勢が主にメディアでよく報道されてきているため、よいイメージをもたれている方は少ないかと思います。しかし今回はあえてこの“情勢”から少し視点を変えて、経済分野の交流や二国間の往来訪問者数の伸び等日本の方にあまり知られていないイスラエルの一面を皆さんにご紹介したいと思います。

## イスラエルの概要

イスラエルの国土は、約2.2万km<sup>2</sup>と日本の四国程度の広さで、人口は約880万人と、面積、人口共に日本の10分の1以下の小さな国です。しかし、イスラエルはスタートアップ\*3国家としての知名度が非常に高



イスラエルと周辺国

\*3 新しく設立したばかりの会社のうち、ただ起業するだけでなく、非常に大きな成長を続けていくことができる形態のものを言う。なお、イスラエルでは年間600~1,000社が起業していると言われている。

く、日々、数多くのイノベーションが生まれ出され、多数のスタートアップ企業が常時生まれております。また、このイノベーションやアイデアを求めて、Intel、Microsoft、Google、Apple等の大手外資企業数百社が当地にR&D\*4センターを開設している等、海外からの投資も多いため、2016年の一人あたりGDPは日本とほぼ同額\*5であり、また、中東で唯一のOECD加盟国\*6と、比較的裕福な国なのです。

次にイスラエルの地勢について述べると、イスラエル=中東=砂漠気候と誤解されがちですが、イスラエル国土の南部地域は砂漠気候に属しているものの、国民の大半が暮らしているテルアビブ、エルサレムを含む中部、北部地域は地中海に面していることもあり、地中海性気候に属しています。そのため、例えば東京とテルアビブの8月の平均最高気温はほぼ同じであり、北部の山間地帯では冷涼な高山気候で、冬には降雪もあり、スキー場もあります。筆者は、テルアビブ近くの住宅街に住んでいましたが、夏は暑く、冬は寒く、日本人にとって馴染みやすい気候だった印象があります。

## イスラエルでの生活

帰任後、家族帯同でイスラエルに赴任していた事を周囲の方に話す都度、“家族に危険が及ぶようなことはなかったのか”等とよく聞かれますが、赴任中の約3年間で危険を感じた事はほとんどありませんでした。

イスラエルではテロや紛争が恒常的に起きていると思われがちのようです。確かに、イスラエルを取り囲む、政情が不安定な国や地域ではそのような事象が頻発しております。かつては、それらの地域からイスラエルにテロリストが侵入し、人が集まりやすいバス車内やショッピングモール等において、同時に大勢を殺傷する爆弾テロ等が起きておりました。しかし、今その状況は変化しつつあります。特に、筆者が赴任した2014年春以降は、上述したような大規模なテロは発生しておらず、イスラエルにおける体感治安\*7は比較的

穏やかであり、東京での暮らしと比較しても、ほとんど変わらない生活ができたと感じています。理由の一つとして挙げられるのは、イスラエルの国境における物理的なセキュリティチェックは世界一といわれるほど厳しい等、テロリストのイスラエルへの入国が厳しくなっていることや、テロリスト間の連絡のやりとりも難しくなっているためのようなのです。

家族にとっては初の海外生活でしたが、概して生活環境は快適でした。筆者は子どもを二人伴っての赴任でしたが、イスラエルの平均出生率は約3.0と子どもが多い事もあり、大人の子どものに対する寛容さが他国と比べて高い気がしました。また、イスラエルでは特に日本や日本人に対するイメージが非常に良く、一部の人によっては憧れのようなものがあり、この点でも過ごしやすさにつながったと感じています。

ここで一つエピソードを紹介します。ある朝、大使館に向かう途中の交差点で信号待ちをしている時、隣にいた婦人と立ち話になり、筆者が日本人とわかると、いい国からきたのね、と言われたので、行ったことがあるか訪ねたところ、“いいえ、行った事はないわ。でも、資生堂の化粧品はすばらしいし、これだけ多くの優れた車\*8を造るのだから、きっと素敵なお国なのだろうなと思うわ”と答えてくれました。

日本食もブームになっており、様々な日本食材が国内の市場やスーパーで購入できます。ちなみに米はあきたこまちが買えました。アルコール類についても、多種の日本酒、ビール（日本のクラフトビールもあり



テルアビブ都心部

\*4 Research and Development (研究開発) の略称

現在の市場ニーズに対応しながら売上をだす製品生産とは別に、将来の新商品の開発や新しい技術を確立することで将来の売上に結びつける、企業の将来的な方向性を担う業務。

\*5 日本：38,882.64米ドル (22位)、イスラエル：37,192.14米ドル (25位) <出典>IMF (2017年10月版)

\*6 2010年に加盟

\*7 人が感覚的・主観的に感じている治安の情勢をいう。

\*8 イスラエルでの日本車のシェアはトップ（全輸入台数の約4割）と、高い人気を得ている。

ます)、焼酎が市販されており、最近ではチョーヤの梅酒も人気を誇っています。

特筆すべきはしょうゆで、日本からのしょうゆの国別一人あたり輸出量はイスラエルがなんと世界第3位\*9です。その証拠にイスラエル人のほとんどの家庭にはしょうゆの小瓶が常備されています。

また、イスラエルには約500の和食レストラン（主に寿司を扱う店）があります。他方、日本人シェフの数はわずか10人程度と、たいていのそれは似て非なる感は否めませんが、日本の幅広い食材に高い関心が寄せられている事は間違いありません。2017年には、初のとんこつラーメン店が日本人の指導の下、テルアビブに開業しました。ユダヤ教の食事規定上、ユダヤ教徒は豚肉を食べることができないため、開店当初は売れ行きを懸念する声もありましたが、テルアビブには無宗教派はもちろんのこと、ユダヤ教徒でも食事規定を気にしないイスラエル人が多くいるためか、好調のようです。加えて、日本人駐在員にとっても故郷の味を楽しめる場所の一つになりつつあります。

### 在イスラエル日本国大使館での業務

大使館において、筆者が主に関わった直行便就航促進とインバウンドツーリズム振興を紹介します。

日本－イスラエル間定期直行便に関しては、1999年に日・イスラエル政府間で直行便に係る航空協定が締結されましたが、経済情勢の変化等で実現しないままでありました。しかし、2014年5月にネタニヤフ首相が日本を、2015年1月に安倍総理がイスラエルを訪問した結果、両政府間で直行便開設の実現に向けての取り組みを進めることになり2015年7月には両政府の航空当局間協議が開催され、航空会社が就航しやすいように同協定の内容の見直しが行われました。その結果、2015年10月に全日本空輸が成田－ブリュッセル間の直行便を開設した際、他会社の機材を使ったコードシェア便ながらも、ブリュッセル－テルアビブ間の全日本空輸便の就航に至りました\*10。

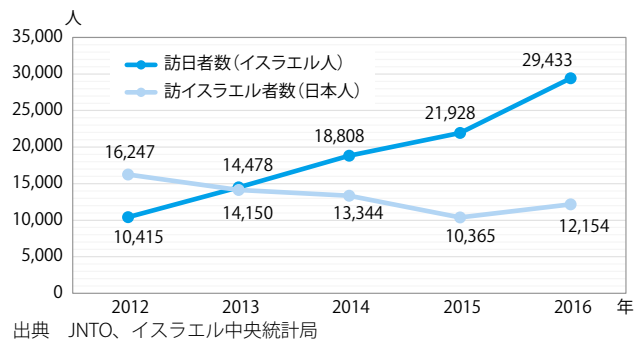


図 日・イスラエル二国間訪問者数推移

なお、2015年1月の安倍総理のイスラエル訪問の際、エルサレムにてJETRO（（独）日本貿易振興機構）による「日本・イスラエル・ビジネスフォーラム」が開催され、日本からは、食品・電機・機械・化学などの分野から約180名の企業・団体代表者らが参加しました。これにより日本企業のイスラエルに対する関心が高まり、以降、日本からの経済ミッションや、二国間企業の提携等の案件が増えるようになりました。結果、イスラエルに来られる方々からの直行便早期就航を要望する声がより強くなってきております。

また、イスラエルでは日本観光ブームがおきつつあり、日本への訪問者数は年々上昇傾向にあります。しかし残念なことに中国、韓国のようにイスラエルへの直行便がないため\*11、日本までの所要時間が多くかかってしまうことが、渡航者数増加の阻害要因の一つとなっております。

この直行便就航と観光客増加は鶏と卵のような関係であり、どちらが先かというよりも双方を同時に促進する必要があります。そのため、在任中に筆者は現地のメディアを通して日本PRを行ったり、当地での国際観光展等、大使館が主催・後援する各イベントにおいて、日本への観光に加えて全日本空輸便での訪日を呼びかけました。このかいもあってか、2016年のテルアビブからの全日本空輸便の利用者数は前年比5割増し\*12、日本へのイスラエル人訪問者数も、図のとおり、累進的に増えてきております。

\*9 醤油PR協議会調べ（平成28年度実績）

\*10 2017年12月現在、全日本空輸・ルフトハンザ航空のコードシェアによる成田・羽田－フランクフルト－テルアビブ線も開設されている。

\*11 テルアビブからの直行便に関し、大韓航空がソウル線、ELAL航空（イスラエル）が北京線、海南航空（中国）が北京線と上海線、キャセイパシフィック（香港）が香港線を運航している。

\*12 ANAイスラエル支店調べ

他方、イスラエルへの日本人訪問者数が伸び悩んでいます。これは、前述したように、現在の治安情勢だけがクローズアップされ、イスラエルの魅力が十分に知られていないことも要因のひとつではないかと思えますので、次では、観光について記載します。

## イスラエルの観光

イスラエルには、世界にオンリーワンの観光地が多くあります。

まず紹介すべきは、聖都エルサレムの旧市街でしょう。ユネスコの世界遺産リストには、“エルサレムの旧市街とその城壁群”として登録されており、城壁に囲まれた約1km<sup>2</sup>の広さの旧市街の中に、古くからの街並みが残っており、キリスト教徒、ユダヤ教徒、イスラム教徒等が暮らしています。この旧市街には、今から約2000年前にローマ軍に破壊されたエルサレム神殿の一部として伝えられている「嘆きの壁」や、イエス・キリストが死刑を宣告されてから十字架を背負って死刑台までを歩いたと伝えられている道「ビア・ドロローサ」、そして、イエス・キリストが処刑されたゴルゴダの丘があったと言われている場所に建つ「聖墳墓教会」があります。また、ユダヤ教徒にとって聖地とされているエルサレム神殿がかつて存在していた場所は、現在、預言者ムハンマドが一夜のうちに昇天する旅を体験した事を記念するためにつくられた、アル＝アクサー・モスクと、岩のドームがあり、イスラム教徒の聖地でもあります。同じ場所がユダヤ、イスラム双方の聖地となっているのです。このように、エルサレ



ユダヤ教ヘリテージセンターから俯瞰（ふかん）した、嘆きの壁（画面手前）と岩のドーム（画面奥）

ム旧市街は、キリスト教、ユダヤ教、イスラム教という三つの宗教にとって非常に重要な聖地で、一見の価値があります。

次のオンリーワンは死海です。年間降水量が低い乾燥地帯にあることに加え、死海の湖面が海拔マイナス400m近い盆地にあるため、死海一帯の年平均気温が非常に高く、湖水からの蒸発量が湖水への水分供給量を上回ることによって、高い塩分濃度が生みだされており、現在の塩分濃度は海水の10倍の約30%にもなっています。訪問時に、試しに舐めてみましたが、塩辛いを超えて、舌にビリビリと痛みを感じるほどでした。死海の湖岸には公共（無料）や民間（有料）のビーチが数カ所ありますが、高い濃度で浮力が強いので、泳ぐのではなく身体を湖面に浮かせて楽しめます。また、この死海の塩は美容にも効果があるといわれており、死海で採れた塩を原料として作られた石けんやバスソルト、コスメ等が大変人気で、世界各地で販売されています。日本国内では、テルアビブ発祥のコスメショップ「SABON」が既に約40店舗ほど展開しており、そのうちの1店が札幌駅のステラプレイス内にありますので、立ち寄られて死海を感じられてみてはいかがでしょうか。

なお、この紙面だけでは十分にイスラエル観光の魅力をお伝えすることはできないので、駐日イスラエル大使館で作成した日本人向けのイスラエル観光PRアニメーションをご紹介します。ご興味のある方はぜひご覧ください。

キーワード“いいね！イスラエル 咲と典子の姉妹旅行”で検索するか、下記YouTubeサイトで視聴できます。  
<https://www.youtube.com/watch?v=UFT22S9euEI>



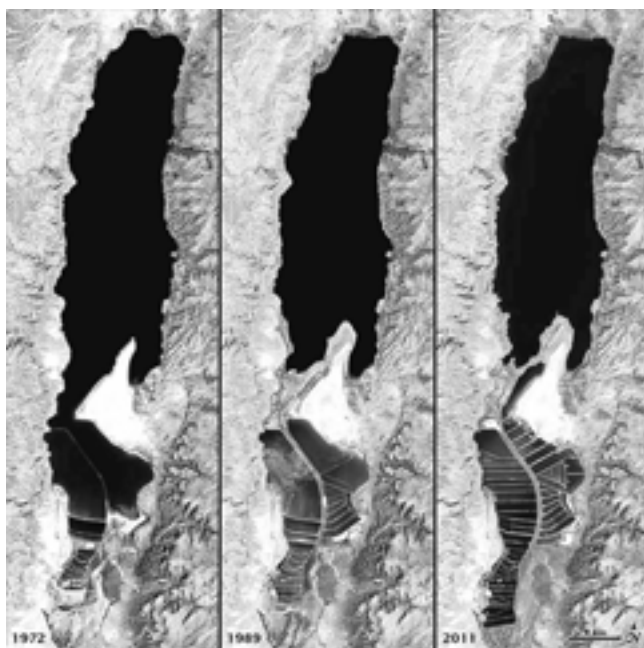
死海に浮かぶ一般客

## しばむ死海

死海についてももう少し記載します。

現在、死海の湖面水位は、年々低下の一途を辿<sup>たど</sup>っています。ヨルダンとの国境に沿って死海まで流れているヨルダン川は、イスラエルとヨルダン両国の生活用水に利用され、年々その利用量が増えている一方で、死海周辺の降水量が減少しているため、現在、死海の水位は年平均1mのスピードで低下しています。ある専門家によれば、2050年には元の湖面面積の半分にまで縮小するという予測がでており、湖面低下と同時に地下水位も下がるため死海沿岸各地で陥没が発生する、シンクホール現象が現れており、環境面でも問題になっています。

このため、これを防止することに加え、周辺地域の慢性的な水不足の解消を目的として、「紅海死海プロジェクト」が立案され、2013年12月にヨルダン、パレスチナ、イスラエルの3者によって、これに関するMOU<sup>\*13</sup>が締結されました。同プロジェクトの概要は、死海から約180km南にある紅海から海水をくみ上げ、脱塩水化処理で淡水を生成し、パレスチナ、ヨルダン、イスラエルの水が不足している地域にそれを供給し、同時に、脱塩水化処理の過程で生み出された濃縮海水をパイプラインで死海に輸送、注入し、死海の水位を維持しようというものです。これが実現すれば、周辺



NASA Earth Observatory/USGS.

「NASA Earth Observatory」による死海水位の変化写真。かつて一つの湖だったものが、現在は、中央部を境に北部と南部の湖に分かれてしまっている。

地域の水不足問題・環境問題が解決されるのみならず、3者間の関係改善にも一役買うのではと期待されています。

なお、2016年末に、同プロジェクトに係る事前資格確認審査の入札が行われ、応札した外資企業17社から5社が選定されました。2017年12月現在、本入札の準備がすすめられておりますが、この5社のうち1社は日本企業であり、イスラエルにおける日本インフラ企業のプレゼンスがあがることを期待しております。

## 最後に

冒頭でも述べましたが、両国間の距離とアクセスの悪さが互いの理解の妨げになっているかと思えます。他方で、双方の理解が進みつつあるのも事実です。筆者が赴任していた約3年の間、多くの日本企業の方々が来訪された際、皆さん口をそろえて、技術が高いことは理解したが、訪問前に想像していたイスラエルの街のイメージとは全く異なり、きれいで活気があり非常に驚いたとおっしゃってくださいました。その様な声を聞く度に、日本とイスラエルがつながりつつあると感じました。

2017年12月のトランプ大統領のエルサレム首都宣言以降、イスラエルに対するイメージが少し後退しており、筆者としては非常に残念です。エルサレム、特に旧市街で緊張状態がつづいているようですが<sup>\*14</sup>、対してテルアビブではそれほど変化はない状況だと、現在もイスラエルに住んでいる元同僚達から聞いております。一刻も早くエルサレムの件がなんらかの形で進展し、イスラエルとアラブ諸国の間で政治的関係のみならず、経済関係が発展することを祈念して筆を置きたいと思えます。

\*13 MOU 了解覚書（りょうかいおぼえがき）

行政機関等の組織間の合意事項を記した文書であり、通常、法的拘束力を有さない。条約締結の際に必要な国会での承認手続のような複雑な手続が必須でないため、複数の国家の行政機関間での制度の運用などに関する取り決めは了解覚書の形式を取ることが多い。

\*14 2017年12月現在。